

Title	序：ジョナサン・エドワーズ
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.26, 2003.3 : 3-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4118
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

序 — ジョナサン・エドワーズ —

聖学院大学総合研究所所長

大木 英 夫

今年はジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards 1703-1758) の生誕三〇〇年の記念の年である。プリンストン大学とプリンストン神学大学院共催で、その記念の行事が催された。たまたまスタックハウス教授を訪ねるためプリンストンに行き、ついでにこの開会の記念講演会に出た。エドワーズの末裔やプリンストン大学大学院々長を最近までしていたジョン・F・ウィルソン教授が挨拶した。ウィルソン教授はわたしのユニオン留学時代の古い友人で、われわれの総合研究所アメリカ・ヨーロッパ研究センターのアドヴァイザーのひとりである (紀要二四号序文に言及したケンブリッジのハウズ教授もそのひとり)。開会の講演者は、リチャード・ニーバーの子息で、ハーバードの教授であったリチャード・ラインホルド・ニーバーであった。彼は昔から思索的な人で、エドワーズの哲学的な面を取り扱ったものであった。会のあとで、ウィルソンに紹介されてラインホルド・ニーバーの息子クリストファー・ニーバーに会った。父に似た相貌に驚きと懐かしさを覚えた。

帰国して、新聞の文化欄掲載に掲載された本間長世氏がブッシュ政権の外交姿勢を批判した文を読んだ。その批判は、ケナンやリップマンの「賢慮」を思い起こし、それに謙虚に学ぶことをすすめた

もので、その趣旨には賛成である。その二人の「賢慮」にはラインホルド・ニーバーの影響があったし、そこに言及されていたアーサー・シュレジンジャーも同様ニーバーリアンであった。謙虚の徳は、ラインホルド・ニーバーの思想と教訓の中心概念であった。

しかし、本間氏の発言は、ある意味で日本の知識人の通俗的な見方を代表したものであるとしても、アメリカ研究の専門家としてその通俗性を戒めるものとはなっていないのが気になった。たとえば、ブッシュを単純に「キリスト教原理主義」という概念で捉えているが、学者の議論としては問題を残すのではないかと思う。あるテレビタレント評論家は、ブッシュのキリスト教を「ボーン・アゲイン・キリスト教」だと言ったことがあった。この見方には多少の妥当性はある。スタックハウズ教授は、ブッシュはジミー・カーターのようにニーバーを読んでいないと言った。日本の議論にはそういう視野がない。カーターは日本のある教授によれば、南部バプテストの「フアナティック」なクリスチャンと規定された。ともかくアメリカの宗教的深層構造をどう捉えるか、それは日本の知性にとつては一個の難題であるようだ。

たまたまエドワーズの学会をのぞいたから言うわけでもないが、最後にはプリンストンの学長になったほどのエドワーズにも、ボーン・アゲイン的「要素」があったことを思い起こすのである。そのことを考え合わせるならば、上記のわが国の論者たちのように簡単に言い切ることは知的ためらいが起こるかも知れないと思う。エドワーズの名は、アメリカ社会史上決して軽視できない「大覚醒」(the Great Awakening)の出来事と結び付けられているからである。その伝統が現アメリカ大統領の中に再生していると言えないこともない。この事実をどう評価するかは、決して簡単なことではないが、しかし無視すべきではない。クリントンに見られるアメリカの知的エリートたちの不道徳とは対比的な現象でもある。これについて基礎的理解を得るのに役立つのは、ペリー・ミラーの *Error into*

Wildernessであろう。その訳が出た。ある英文学者の仕事である。しかし、そのような英語専門家にしては、アメリカ理解のレベルを露呈したなんともミゼラブルなものとなっている。それにもかかわらず、ミラーを注意深く読むという課題は、決して時代遅れではないし、さきにのべたこととの関連で必要であろう。

もうひとつ、「反ユダヤ主義ではあるがイスラエルの存在は認めるキリスト教原理主義」という本間氏の判断についてだが、そこにも、アメリカ・プロテスタンティズムの理解における問題性が伏在しているように思われる。たとえば、ピューリタンの伝統の中には、日本では内村鑑三にもあつた（内村鑑三の頃の用語で言えば）「ユダヤ人のための祷告」という聖書解釈的かつ実践的課題があることである。クロムエル時代の終末論的ピューリタニズムの中にもそれがあつた。そこにプロテスタン・キリスト教のユダヤ教的なものへの関係点がある。ピューリタニズムの契約思想から「ボーン・アゲイン」（再生）の要求がなぜでるか、またそれと絡んでその契約思想がなぜ今日のアメリカにおけるユダヤ教的伝統との結合を産み出すのか、このあたりを説明することも、アメリカの精神状況の深層構造の理解のためには、必要ではないかと思う。要するにアメリカはそう簡単ではないことを知るべきであろう。その評論は、「ネオコン」の系譜をアーヴィング・クリストルに結び付けるが、レオ・シュトラウスの流れにおいて理解する向きもあることも指摘されてよいと思うし、アメリカではそう単純化していないようである。

この機会に、日本のアメリカ研究は一からやり直すほどの決意をもつてよいのではないか。いずれにせよ、ジョン・ササン・エドワーズをどう読むか、それはアメリカの精神構造の理解にとって、試金石であることは認められてよいと思う。こんな思いを、わが総合研究所からジョン・ササン・エドワーズ三〇〇年を覚えてささげる記念としたいと思う。